
君を想う

朧蒼月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君を想う

【著者名】

朧蒼月

N8464C

【あらすじ】

「ミーン、ミーン……」病室のベッドの上から見える景色は毎日同じ。俺、桜咲流^{さくらじゅりゅう}依は、籠の中の鳥も同然だ。今春、15歳を迎えた俺は普通だつたら受験生。勉強に精を出しているはずだった。

「ミーーン、ミーーン……」

病室のベッドの上から見える景色は毎日同じ。

俺、桜咲 さくひな 流依は、籠の中の鳥も同然だ。

今春、15歳を迎えた俺は普通だつたら受験生。勉強に精を出しているはずだつた。

しかし、日を送る』とに『貧血』『動悸』『息切れ』などが頻発するようになつた。

心配した母が病院に連れて行ってくれ、検査を受けた。そして

『特発性再生不良性貧血にかかっている

という事実を聞かされた。

人間は誰でも『造血幹細胞』を骨髄中に持つている。これは、赤血球や好中球、血小板の基になるものだ。

赤血球は約120日、好中球は約半日、血小板は約10日で壊れる。本来ならこれを補うため、毎日大量にこの3種類の血球を作る。しかし俺は、自らのリンパ球が『造血幹細胞』を壊し、これらを補えない。

だから、赤血球の不足により酸素欠乏が起こり、さまざまな症状が現れるのだ。

そして、この病気は『難病指定』されている。

重症なら、1年の生存率は30%

現在は骨髄移植で5年の生存率は80%。

注射薬投与により60%の人間が回復する。

だが、俺には骨髄の型が会う人間もいなければ、薬も効かなかつた。今は、赤血球を人工的に補つたりして症状を和らげている。

そして…すぐそこにある『死』に向かつて歩むばかりだ。

「コンコン」

「柚希か？」

「うん。」

「いいよ。」

「お邪魔しま～す。」

そうこうでドアを開け、入ってきたのは『藤野 柚希』だった。
肩まで伸ばした髪を揺らしながら、ちらに歩み寄つてくる。

「おはよう～。」

「もつとだけど～。」

「あたしは今起きたから、おはよ～でこ～の～。」

隣の部屋に入院している彼女は、病人とは思えないほど、明るい。柚希は自分の病気について、何も話してくれないが。

「そか。じゃあおはよう。」

「ねえ。外、行かない？」

「うん。行くよ。」

彼女の手を借りながら、ベッドを降り中庭へと向かう。太陽の光が眩しい。俺達が向かうのは、片隅にある大きな木下のベンチ。そして俺達はここで出会った。

3ヶ月前、このベンチに座っていた俺に
「君、なんていうの？」
と、微笑みながら話しかけてきたのが柚希だった。その微笑みは、さながら太陽のようだ。俺は一瞬の内に彼女に好意を持ったのだった。そしてそれが段々と恋愛感情へと移り変わつていつているのも直覚している。

俺に残された時間は多くは無い。
どうせ死ぬなら、好きな人の腕の中で死にたい。
だから、俺は決意してきたのだ、この想いを伝えようと。

隣に座っている柚希は歌を口ずさみながら足をブランブランさせている。その顔はどことなく楽しそうに微笑んでいて、心を暖かくしてくれた。

「なあ。」

「ん？ なに？」

「俺等いつたい、今いじで玉合ひたそだよな？」

「うさ。申も同じだつたし、それからほんたう。」

「これからもひ、すうとこいつかって俺の隣にいてくれないか？」

心臓の鼓動が早くなる。

「こ、あ。」

「え？ 俺とすき合つてはれつてはりなんだぞ。」

「あ、そつだつたんだ。ううん……」

「せ、ダメ……」

「いいよ。あたしも、流依の事好きだし。」

「え！ 今なんて？」

「だから、いいよつて。」

「……あ、ありがとつ。それから、よろしく。」

「えへへ、ひひひひひ。あ、プレゼントあるんだ。田つぶつて。」

言われるがまま、田をつぶる。

「つー？」

「嫌、だった？」

「あ、いや、ビックリして……。」

「なら、もう一回。」

「もう一回つて……。キスって人前でするもんじゃないぞ？」

「誰も見てないからいいの。」

「はいはい、それじゃあ田つぶつて。」

「え？ 流依がしてくれるの？」

「女に襲われるなんて、男の恥だ。ほら、早く」

柚希が田をつぶつた。
心臓が強く脈打つ。

それは、異常なほどの速さで。

「うつー！ あ、ああ……」

「？ 流依？ 流依！」

柚希に抱きかかえられた状態で、意識が遠のく。

「そうか、俺このまま死ぬんだ……。」

「まあいいか。」

「望みどおり、大好きな人の腕の中で死ねるんだ。」

「でも、その大好きな人が何ていう病気にかかっているか知りたかったな。」

「柚希。ごめんな？」

「もうちょっと一緒に居たかったんだけど。」

「出来そうにないや。」

「ここはどこだろ？？」

「辺りにはただ漆黒が広がっている。」

「上も下も、右も左も、何も無い。」

「闇だけが広がっている。」

「不意に目の前に、小さな光が灯り始めた。」

「だんだんと大きくなる光はやがて、人の形を成す。」

「柚希……。」

「一瞬でもいいから会いたかったその人が、目の前に現れたのだった。」

「たつた一言、謝る事が出来たらいいのに、」

「たつた一言、伝えられたらしいのに、」

「喋る事が出来なかつた。」

喉まで出でている、Jの想いは音にならない。

ただ、目の前で微笑んでいる君に

「今までありがとう。大好きだよ。」

と、言つことが出来たらいいのに。

手を伸ばしても、触れることの出来ない光は
次第に暗くなり、やがて消えてしまったのだった。

目をつぶると、そこには俺がいた。

暗い部屋で、柚希に抱かれ、静かに眠っている俺を見た。

そうか、やっぱり死んだんだ、俺。

柚希をこんなに泣かせちゃって……。

彼氏、失格かな。

柚希に近寄る。

涙で濡れた瞳を見つめる。

「空から、見守ってるよ。こつまでも、こつまでも……。」

出来ることなら、また話したかったんだけど。

出来ることなら、また一緒に笑って居たかったんだけど。

そして、願いは決意へと変わる。

想いがあれば、また会える。

愛しい彼女に、

謝つて、

好きだつて言つて、

抱きしめて、

ありがとうつて言つて、

そして、とうとうならつて言つんだ。

そうじやなきや、俺は完全に死に切れない。

待つてくれ、柚希。

何年後になるか分かんないけど、絶対に抱きしめに行くから。

きっと俺は、柚希と逢つてみせる。

柚希の事、世界中の誰より、好きだから……。

(後書き)

閲覧有難うござります。

第2作目の短編小説、いかがだったでしょうか？

「君を想ひ」

は続編も考えておりますので、

またお時間があれば、そちらにも直しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8464c/>

君を想う

2011年1月15日21時21分発行